

Ritsuki Fujisaki Gallery

-

Ritsuki Fujisaki Gallery の最も特徴的な部分は、湾曲したレトロな窓のディスプレイだ。

外観は、80 年代に建てられた 5 階建てのビルで、この窓たちはモザイク上のスタッコボンドタイルに囲まれて繰り返される。

それはまるで 5 つの連続する開かれた本の背表紙のようで、湾曲した窓沿いに、外へはみ出る植物たちは、隠喩的に外の世界と内の世界を結んでいる。

-

Taka は、この窓を半透明のプラスチックのシートで覆った。

それらは柳橋通からの色相と光に浸かり、シャワーカーテンとスクリーンの間に印象をもたらす。

まるで撮影中に投影機が壊れてしまったかのように、それは鑑賞者を何も無い表層と対峙させ、そのスクリーンは、鑑賞者の中で、パレイドリア効果によって再考される。

-
祝福を伴った受容と、反抗的な態度が共存する隠喩たちは、down4u の作品全体に維持されている緊張を生み出す。

蜘蛛の巣のように張り巡らされた曖昧さが意図されたものと偶発的なものとを繋ぎ合わせる。

"Watercolor"のシリーズでは、Taka は連続的な転写のプロセスを通じて、日本画を喚起させる。

元となるイメージは、転写による化学反応と転写先の木目のテクスチャと共に統合されるが、ただその結果はよりパレイドリア的なものだ。

難破船から運び出された浸水した残骸、アルミ版、木を覆うフジツボ、小さな頭の彫刻。

シートで覆われた窓には元となるイメージ、バスルームの床に絡みつく髪の毛のイメージが貼り付けられている。

それはバスルームの壁に自発的に残ったものであり、その髪は、"私はあなたを護っていた、なのにどうして.."と綴られており、そして、私たちはプラスチックのシートに挟まれたその残滓を見る。

垂直のアルミの柱が、その写真を幽霊のように、バナー状の枠を与える。

それは周縁部の植物の外にある、神社の旗の残響かも知れない。

-
展示は一見質素だが、複雑だ。

それはまるで偶然性の関係の真っ只中におり、超自然的な欠片の全てを足し合わせたかのようにあり、またこの宇宙は、メインピースの作品("Godsend")のブレイズに暗示されているようだ。

その彫刻は、ツノのついた三葉虫のような形態で、それ脊柱に結合するための髪で出来たタッセルから成るドリームキャッチャーにも見える。

その恐ろしげな対称性は、炎によって確立されている。

なぜなら、その身の両側には 2 本の焦げた蝋燭が配置されているからだ。

ギャラリーの入り口のすぐ隣のガラス窓にその作品は置かれており、壁は J ホラーを想起させる微かなブルーに彩色されている。

-

その壁の裏には、"*Once the heart is dead, there's nothing left*"という作品が壁に磔にされている。

これは、ある種の Man behind the curtain 効果を導入しており、表舞台の真裏で演劇的な試みを露わにする。

青白い LED ライトたちを介した J ホラーの色相が注意を引くが、それらは植物と融合されたようなまきびしに似た彫刻の内側で輝く。

Taka は LED の配線を覆わず、作品は複数の動物的なイメージを想起させるが、壊れた脊髄、宇宙の有刺鉄線、または到達不可能な星座群のように一つの形態に落ち着くことはない。

これは down4u の中で叙述的なタイトルを持つ唯一の作品だ。

-

恐らく、一部のアーティストは、売買のための欺瞞的制作を植え付けられたのちに、予定調和ではないイリュージョンを再燃させるために芸術作品を作っている。

映画制作を取り巻く技術と慣習をあまりに意識するが故に、最早彼は、子供の頃に受けたような衝撃を J ホラーから受けられないことに気付いた。

そして、彼はそれらに登場する長い髪の幽霊のアーキタイプを愛情の関心として
再考し、ロマンスであるかのように観始める。

down4u には参照項の入口が衝突した形で散りばめられている。

リングの貞子がテレビの画面から這い出てくるように。

閉鎖と官能の間の不確定性として、アーカイヴは形作られる。

-

このテキストとテクスチャの逢引は、どちらもお互いを圧倒しようとしており、その展示の名前自身がそのソースを汚染しさえする。

-

"I ride for you, Down for you

Do anything ya want me to

I be ya down ass chick"

-

この展示を体験した後には、アシャンティの歌声に別世界の響きが鳴り始め、まるでアシャンティが妖怪として出現したかのような強い衝撃を伴い、突然それはリバーズエンジニアリングされる。

-

典型的に幽霊の表象は、鑑賞者に信心を意識させることや、失われたものを切望する感覚を引き起こすことにより、テクスチュアリティの原点となる座標を弛緩させる。

David Lynch が行うように、Taka の手口は一般的な演出家のそれとは正反対だ。

彼らはどちらも、テクスチュアリティをエロティックな誇張へ押し出し、完全な正円に向かわせる。

このテクニックは、Mulholland Drive に広く見られる。

それは、エロティックな緊張と超予定調和的な力に務める過剰テクスチュアリティを利用しており、それは表象から切り離されているかのような効果を生む。

映画中に、約 30 分のところで、カーテンとノワールのスポットライトで構成された部屋の中で、アクリルガラスの裏に座るエグゼクティブ、Roque 氏と出会うシーンがある。

そのシーンの強調された人工性はナラティブを超えた、より高い次元での現実性を示しているようだ。

鑑賞者は、対話の中で言及される映画と、鑑賞している映画が全く同一であることを暗黙のうちに了解している。

Roque 氏は、映画の主演として彼が望んでいる女性はキャスティングされないことを予め知っており、彼は威圧的に、映画制作を打ち切り(shut down)にすることを要求し、シーンはゆっくりと黒くフェードアウトする。(もしくは、部屋の光が実際に暗くなっている?)

-

続くシーンには大きな変化があり、散らかったオフィスの中で 2 人のキャラクターが非現実的な事故について全力で笑っている。

そのキャラクターが映画が打ち切られた後に残った、いい加減でコミカルな存在論的残余に縛られていたように、鑑賞者はプロットの内部から解放されるという奇妙な感覚を与える。

あるキャラクターが頭の中で他のキャラクターを突然撃つと、映画のギアは激しく回り始める。

彼が銃を拭いた後、カメラでは極端なクローズアップがされ、水平線上に突き出た犠牲者の髪の毛の上をパンされる。

これは弾道を示すためのカートゥー的な豊かさなのか、もしくは鑑識的で手続的なドラマのパスティーシュなのか？

-
伊藤潤二のように、Taka は二つの相反するホラーの類型を両立させる。

直感的なものと未知なるものは、より大きな力の影響を受けた物体を目にすることにより理解される。

それらの物事の配列を通して。

この配列は、down4u の中では崩壊させられる。

濡れた髪と退廃に関する直感的なホラーは、表象の暗喩が明らかであるために、飼い慣らされているが、その一方で、これらの要素はワイルドカードとしてもレンダリングされている。

なぜなら、これらの配列の要素は、その場所につきまとうために、横断している過剰テクスチュアリティの次元へと家畜化させる振る舞いを行なっているためだ。まるで映画の中で読心術者がパズルボックスのすべての動きを先取りするかのように、Taka の意図と並行して、インスタレーションとの関係の中で、目に見えない力が鑑賞者にウインクをしているように感じさせる。

-

Taka は、その制御されたオリジナルの文脈の中に恐怖が消え去ったのち、ホラーのあとの親密さが暗喩されると話す。

私たちは穏やかではない何か、愛の謎の中に取り残されるのだ。